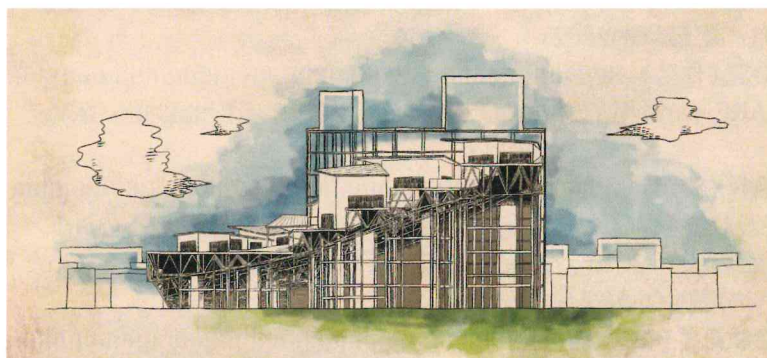


2019-July No.115

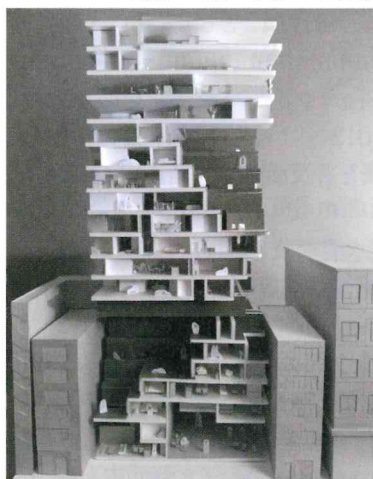
日本大学桜門建築会

<http://www.okenkai.jp/>

2018年度桜建賞受賞作品



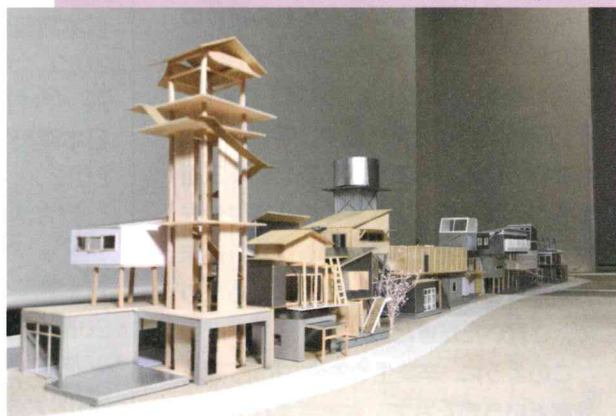
「あたりまえ」の風景 生活に寄生する地域活動の場」小山佳織



「箱入り娘の夜」長瀬紅梨



「地図にない建築 内海を漂う方舟」兵頭秀子



「ふるまいの風景 Fragments of architecture」小川朋大



「JMAM 日本近代建築博物館」須賀友美

contents

特集◎日本建築学会各賞受賞者 2012～19年 湯淺昇 近藤典夫 羽入敏樹——2

斎藤賞・加藤賞・桜建賞 2018年度受賞作品の紹介——6

追悼◎若色峰郎先生を偲ぶ——15

事務局だより——16

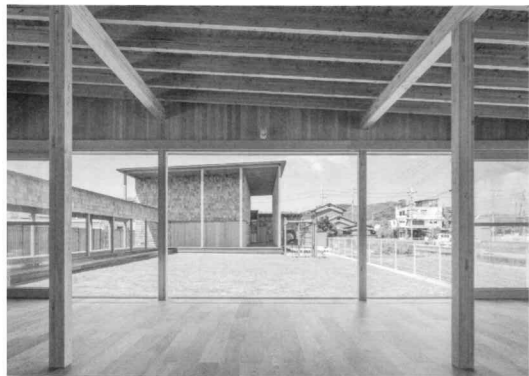
学部ニュース——18

建築関係の賞は数多くあるが、その中でも「日本建築学会」が授与する賞は、論文や作品、業績、教育、著作に至るまで、幅広い観点から評価が与えられる名誉あるもので、これまでも多くの卒業生や先生方が受賞してきている。その中でも大賞は、建築の発展向上に対する長年の業績が評価されるもので、2012年の木村翔名誉教授、2018年の斎藤公男名誉教授（現桜建会会長）と、相次いで受賞されたことは特筆に値する。

そして、本年4月に今年度の受賞者が発表され、学会賞（論文）を3名の先生方が同時に受賞された。これを祝い、お三方の受賞論文について、ご寄稿いただいた。また、残念ながらタイトルだけの紹介に留まるが、卒業生の小野朗さん、今村雅樹特任教授（理工建築）もまた、それぞれ業績と教育貢献で、学会賞を受賞されている。他にも、作品選奨に3組4名が選ばれるなど、多くの卒業生や先生方が受賞されている。詳しくは、近年の受賞者と作品を右の一覧にまとめたので、ご覧いただきたい。

このように、卒業生や先生方の活躍が、受賞というかたちで、さまざまな分野にわたって評価されていることは、この桜建会の裾野の広さを示すものである。さらに、受賞者たちの今後の活躍に注目するとともに、新たな受賞者が次々と現れることにも、ぜひ期待してほしい。

（佐藤慎也／広報委員会委員長）



今年度作品選奨の「めぐみ会第一仏光こども園新園舎」。受賞者の瀬戸健似さんは生産建築、近藤創順さんは理工建築の卒業生。写真／新澤一平

日本建築学会大賞

2012／建築音環境工学の研究・教育とその発展に対する貢献／木村翔（日大名誉教授） 2018／アーキエナリング・デザインの理念に基づく、建築学会活動への貢献と、教育・研究・設計の総合的な実績／斎藤公男（日大名誉教授）

日本建築学会賞（論文）

2019／流体・構造連成問題への有限要素解析に関する一連の研究／近藤典夫（理工海建教授） 2019／建築空間における音場拡散の理論的枠組みと測定法に関する一連の研究／羽入敏樹（短大教授） 2019／表層コンクリートの品質に関する一連の研究／湯浅昇（生産教授）

日本建築学会賞（作品）

2014／SHARE yaraicho／内村綾乃（A studio） 2015／上州富岡駅／鍋島千恵（TNA）

日本建築学会賞（業績）

2018／学生設計優秀作品展 建築・都市・環境」による建築設計教育への貢献／重枝豊（理工建築教授） 2019／サントリーホールの施設運営を通じた長年にわたる音楽文化への貢献／小野朗（永田音響設計）

日本建築学会教育賞（教育業績）

2019／大学連携による教育プログラム「建築トークイン上越」の企画および実践／今村雅樹（理工建築特任教授）（建築トークイン上越実行委員会として受賞）

日本建築学会教育賞（教育貢献）

2012／フィールドワーク・デザインビルドと各種コラボレーションを取り入れた教育活動の実践／畔柳昭雄（理工海建教授） 2013／「けんちく体操」ワークショップを中心とした建築教育プログラムの実践と普及活動／大西正紀（モサキ）

日本建築学会著作賞

2014／建築家と建築士法と住宅をめぐる百年／速水清孝（工准教授） 2015／グリッド都市 スペイン植民都市の起源、形成、変容、転生／布野修司（生産特任教授） 2018／劇場空間の源流／本杉省三（理工建築特任教授）

日本建築学会作品選奨

2012／3331 Arts Chiyoda／佐藤慎也（理工建築准教授）、古澤大輔（メジロスタジオ）、馬場兼伸（同）、黒川泰孝（同） 2013／ちよだの森歯科診療所／小川博央（小川博央建築都市設計事務所） 2013／Ring Around a Tree／大野博史（オーノ JAPAN） 2016／チャイルド・ケモ・ハウス／大野博史（オーノ JAPAN） 2018／東松山農産物直売所／馬場兼伸（ピーツエアー・アーキテクト）、江泉光哲（4FA）、金井直（カナイデザイン） 2019／北方町庁舎／金田勝徳（構造計画プラス・ワン） 2019／めぐみ会第一仏光こども園新園舎／瀬戸健似（プラスニューオフィス）、近藤創順（同） 2019／空の森クリニック／大野博史（オーノ JAPAN）

日本建築学会奨励賞

2013／Study on Landscape Recognition that Uses Image Processing Technology by Local Inhabitants in Kamakura／山田悟史（立命館大助教） 2015／木割書に記述される柱・組物・垂木の関連について 木割の方法に関する研究（その1）／山岸吉弘（工助教） 2016／コンクリートポンプ工法における圧送距離が圧送前後の品質変化に及ぼす一考察／宮田敦典（理工建築助手）

日本建築学会作品選奨新人賞

2013／ちよだの森歯科診療所／小川博央（小川博央建築都市設計事務所） 2014／森のオフィス／菅原大輔（SUGAWARADAI SUKE） 2017／ワカミヤハイツ あだち農まちプロジェクト／落合正行（理工まちづくり工助手）

（所属は受賞当時）

表層コンクリートの品質に関する一連の研究

湯浅昇（生産工学部建築工学科教授）

研究概要

「表層コンクリートの品質に関する一連の研究」で、この度日本建築学会賞（論文）を受賞させていただきました。研究者としては、北海道大学で生まれ、東京工業大学に養子に入り、日本大学に嫁いだと、私の経歴を自分なりに理解しております。本研究は、日本大学において故笠井芳夫先生とともに構築してきたものであり、まさしく私のライフワークをなすものであります。

本研究は、コンクリートの水和の途中で行われる脱型などにより、内部よりも品質が低下する表層コンクリートの含水率、細孔構造の観点から明らかにし、強度低下、外的劣化因子の浸透による耐久性の低下、仕上材の不具合との関係に展開したものです。

博士論文から学会賞受賞への展開

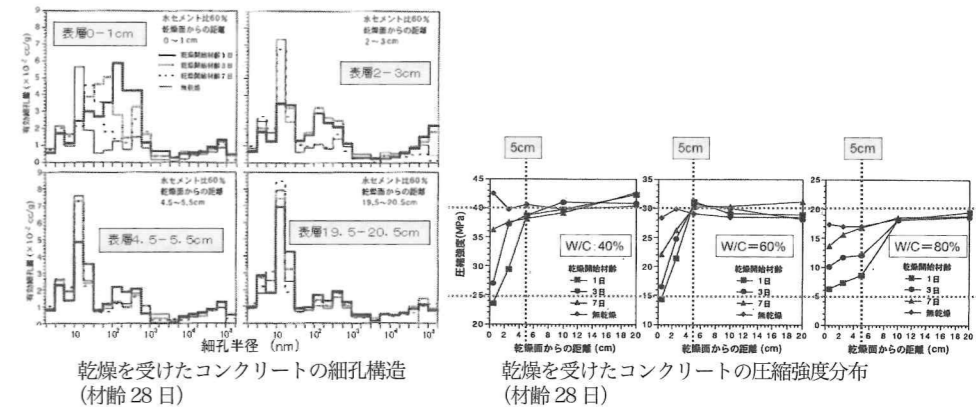
博士（工学）の学位テーマ決定のプロセスにおいて、私の経歴を鑑み、「北大、東工大、日大で培ってきた私だからこそ可能なこと、他の研究者がなし得るものでないことをテーマにする」との大方針を掲げました。

私のスキル・研究活動から、●表層の影響を受ける仕上の不具合を研究（東工大）した経験からすると、なぜコンクリート分野では、きちんと養生したものを対象としているのだろうかという疑問を覚えた。

●仕上材の不具合を防ぐための下地コンクリートの“乾燥”のもつ意味を考えさせられた。

●他の追従を許さない技術をもつ「含水率（当時唯一の北大式水分計技術と日大で自ら開発に携わったセラミックセンサ）」と「細孔構造（北大研究ツールの十八番）」を観点に据えたい。

●必要な試験方法は自らつくことに長けた笠井先生とともに、各種非



乾燥を受けたコンクリートの細孔構造（材齢28日）

乾燥を受けたコンクリートの圧縮強度分布（材齢28日）

破壊試験を開発してきた実績を活かしたい。

●笠井芳夫先生は、なにごとにも長けた研究者であるので、強度、全劣化メカニズム、そして東工大で培った仕上材不具合メカニズムを広く（浅く）ターゲットにする。これらのことを念頭におきました。そして、乾燥の影響を受けるコンクリートの表面に近い層を「表層コンクリート」と定義し、この「表層コンクリート」に求められる所要性能を確保するための情報を提供することを目的とする学位論文を構築しました。

こうして、1998年3月、日本大学より「表層コンクリートの品質に関する基礎的研究」で学位を取得しました。主査は故笠井芳夫先生で、副査のひとりとして北大の恩師、故鎌田英治先生に入ってくださいました。私にとって、そして北大、東工大にとっても、私の学位は日本大学で取得して良かったと、評価されていると、堅く信じております。

実は、この学位取得の段階で大胆な企てを立てています。今回の「日本建築学会賞（論文）」獲得です。それだけ自ら選んだ学位論文の“テーマ”には自信がありました。今回の受賞論文名は、学位論文名の最後「基礎的研究」を「一連の研究」にしたもので、内容は“広く浅く”を“広

くそして深く”することにエネルギーを注いでいます。

謝辞

1990年4月に、日本大学に温かく迎え入れていただいてからほぼ30年、故笠井芳夫先生には、先生がお亡くなりになった2011年10月まで、毎日のように研究をご一緒させていただき、一枚岩の“日本大学笠井・湯浅の研究”として、常に国内外の研究者に影響を与えてこられたと自負しております。先生には研究の王道を歩かせていただきました。生前には叶いませんでしたが、墓前に報告できます。うれしい限りです。

研究を進めるにあたり、多くの先生方、諸先輩、学生諸氏の貴重なご示唆・ご教示・ご協力と応援を賜りました。感謝申し上げます。



Yuasa Noboru
1965年北海道生まれ。88年北海道大学卒業。90年東京工業大学大学院修士課程修了後、日本大学生産工学部へ。98年博士（工学）。現在、日本建築学会解体工事小委員会委員長、日本非破壊検査協会RC部門主査、日本コンクリート工学会コンクリート診断士研修委員会委員長など。日本非破壊検査協会奨励賞（95年）、セメント協会論文賞（98年）、日本建築士学会論文賞（2009年）受賞など。

流体 - 構造連成問題への有限要素解析に関する一連の研究

近藤典夫 (理工学部海洋建築工学科教授)

有限要素法を使う流体計算

私の日本建築学会賞(論文)の研究は、流体-構造連成現象の解明に主眼が置かれています。これは、空気や水・海水などの流体の中に設置された建築物や構造物が、流体の流れの影響を受けてどのような振動現象を生じるのかということです。そして、これらの現象を数値シミュレーションによってとらえるための方法論を示したものです。

私が流体計算の研究を始めたのは30年以上も前のこととなりますが、当時は、流体計算と言えば有限差分法が多用されており、計算精度を高めるための3次上流差分スキームの開発が盛んに行われていました。今日でもあまり変わりはないのですが、有限要素法を使って流体解析を行う研究者は少数派でした。しかし私は、流体の計算に慣れ親しんだ有限要素法を使うこととしました。

私の斬新なアイデア

粘性流体の運動は、数学的にはナビエ・ストークス方程式によって記述されます。ナビエ・ストークス方程式の離散化の過程で、対流項へ中心近似を施すと数値解が不安定になり、上流近似にすると数値解の不安定性が回避されることが初期の段階から知られていました。そのため、有限差分法では1970年代の後半から80年代にかけて開発されたMUSCLやUTOPIAなどの3次上流差分スキームが多用されてきました。3次上流スキームには、流速の4階微分で与えられる数値粘性が含まれています。しかし、有限要素法の世界ではそのような3次上流スキームがつくられておらず、そのため、私は有限要素法でも有限差分法と同等以上の3次上流有限要素スキームを

つくり上げることにしました。

3次上流有限要素スキームをつくるために、私の方法論の斬新なアイデアは次のような流れによるものです。まず、ペトロフ・ガラキ型重み付き残差法を使うことから始まります。流速の4階微分項で表わされる数値粘性をナビエ・ストークス方程式の有限要素方程式に組み込むためには、修正重み関数の付加項を重み関数の3階微分で与えられる関数形にすることになります。この点がこれまで考えられなかった第1のアイデアです。これによって、ナビエ・ストークス方程式の対流項の1階微分と重み関数の3階微分が結びついて、4階微分の数値粘性をつくることができます。

しかし、このままでは付加項は3階微分を含んだままです。一般的には、有限要素法において、1次元ソパラメトリック要素を使った方が簡単にプログラムを作成することができます。したがって、重み関数の3階微分項の2階微分を別な関数へ置き換えるという正準分解を導入すれば、付加項を1階微分の形に変形することが可能になります。これが第2のアイデア。

この正準分解は、構造解析の変位関数と応力関数を用いた混合法の定式化と同じ考えです。正準分解した2階微分項には、さらに重み付き残

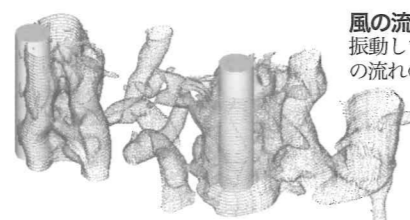
渣方程式を経て有限要素近似により離散方程式をつくることができます。

このような考えに立って、有限要素法でも3次精度上流スキームをつくることができ、これ以降、有限要素法によるナビエ・ストークス方程式の数値解の精度は、有限差分法と同等にすることが可能になり、低レイノルズ数から高レイノルズ数まで、流体計算を精度良く、かつ数値的に安定的なシミュレーションができるようになりました。さらに、有限要素法で3次上流スキームが完成したことで、有限要素体系の中で流体-構造連成問題に関する構造物の流体力学を精度良くとらえられました。

構造物の振動現象を正確にとらえる

本研究で採用した構造物モデルは1質点2自由度のごく簡単な剛体モデルです。このモデルは、流体流れに沿って流れ方向と流れ直交方向の2方向に自由に振動しますが、構造物の断面形状が角柱または円柱のいずれかにより、その構造物の振動はギャロッピングか、渦励振のいずれかが現れます。これらの振動現象を本計算スキームによって正確にとらえられることを示しました。

本研究で示した方法論が、多くの研究者・技術者、そしてこのような分野に興味を抱いている学生諸君に大いに役立てば幸いです。



風の流れ
振動している直列2円柱まわりの風の
流れの瞬間図(瞬間圧力分布図)



地震動
エル・セントロ地震動による大型円筒タンク内の
スロッシング

Kondo Norio
1956年福島県生まれ。79年日本大学生産工学部数理工学科卒業、85年日本大学大学院理工学研究科博士後期課程海洋建築工学専攻修了。工学博士。共著に『海と海洋建築21世紀はどこに住むのか』『応用力学演習問題と解説』など。1992年日本建築学会奨励賞受賞。



建築空間における音場拡散の理論的枠組みと測定法に関する一連の研究

羽入敏樹 (短期大学部建築・生活デザイン学科教授)

未解決の建築音響学の課題

音楽ホールや劇場では残響時間が同じでも響きの印象が異なることが知られています。この響きの違いをもたらす要因として「音場の拡散性」があげられます。そのため建築空間の音響設計では、図1のように壁面の凹凸によって「音場の拡散性」を制御することが最終的な「残響の質」を決める重要なポイントになります。しかし従来、この拡散の設計は設計者の経験と勘に頼っており、必ずしも好ましい音響効果が得られないという問題がありました。

残響時間は19世紀末に、W. C. Sabineが提案した建築音響学の基盤となっている重要な指標です。しかし、残響時間は室が完全拡散音場であることを前提としていて、従来の残響理論では壁面の凹凸による拡散性の違いを扱えないのです。この建築音響学の根本問題は、21世紀に入っても未解決のまま残っていました。

音場拡散をとらえ、設計につなげる

受賞対象となった業績は、これらの問題を解決して音場拡散の設計基盤を築くために、①音場拡散の理論的枠組みの構築、ならびに②音場拡散の測定法の確立、というふたつの課題に取り組んだ一連の研究です。

①については、まず室内音場の拡散性を記述するための理論的枠組みを構築しました。続いて、従来の残響理論で用いる吸音率に加え、平均散乱反射率や平均鏡面反射率など、壁面の凹凸の効果を表すパラメータを新たに定義して組み込むことで、音場の拡散性を扱える残響理論を提案しました。従来の残響理論では「残響」の計算しかできませんでしたが、提案理論では図2に示すように、残響を壁面で拡散反射した「拡散成分」と

鏡面反射した「非拡散成分」に分けて計算できます。両者の比率は壁面の凹凸で制御でき、これにより「残響の質」が決まります。さらに提案理論を基にして、拡散時間や平均散乱時間など、音場拡散に関する新しい概念、評価指標を種々提案しました。従来の残響時間に加えてこれらの新しい指標を用いることで、室内音響設計に新たな視点と可能性をもたらしました。

②については、従来は困難であった、拡散設計の効果を実際に測定して評価する手法の研究です。一般に、室内音響特性を測定・評価するにはインパルス応答を測定します。残響時間もインパルス応答から解析できます。本研究では、インパルス応答から減衰を除去して反射音構造を明確にした「減衰除去インパルス応答」を算出し、反射音エネルギーの変動の大きさを定量化することで拡散性を評価する手法を確立しました。そして、この手法を実際のホールやスタジオなど、さまざまな音場に適用して有効性を示しました。本手法は海外の録音スタジオの設計にも用いられ、音響設計がなされています。

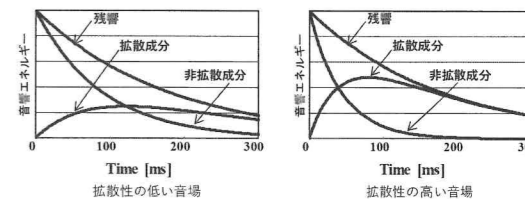
一連の研究は、長年、建築音響学の未解決問題であった音場拡散に関し、その理論構築と測定法の確立を図ったものです。そして、完全拡散を前提とした従来の音場理論を再構築する試みでもあり、新たなパラダイムになり得ると考えています。

「好奇心」と「夢」が原動力

およそ30年にわたり建築音響の研究をしてきた中で、途中、さまざまな困難がありました。しかし、私を突き動かしたのは、未解明であった音の拡散に対する「好奇心」と、建築音響学の根本問題を解決したいという「夢」でした。

今回の私の受賞は、日大の環境系の木村翔先生、関口克明先生、井上勝夫先生に続いて4人目となります。同じ研究系列で、連続して名誉ある賞を受賞できたことは、他に類を見ないことでしょう。私は、自分が面白いと思うことを不器用でもやり続けられれば、必ず成し遂げられるし、それは誰にでもできると信じています。

最後になりましたが、私が今まで研究を続けることができたのは、多くの先生方、諸先輩方、大学の同僚、スタッフ、研究室の歴代の院生や学生など、実に多くの方々にご指導とご支援をいただいたおかげであると実感しています。改めまして深く感謝申し上げます。



上/図1 音楽ホール壁面の凹凸による拡散性の制御
下/図2 提案理論による拡散・非拡散成分の計算例



Hanyu Toshiki
1965年新潟県生まれ。88年日本大学理工学部建築学科卒業、90年松下通信工業入社。94年日本大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。共著に『コンサートホールの科学形と音のハーモニー』など。90年日本建築学会優秀修士論文賞、95年日本建築学会奨励賞、2014年日本騒音制御学会環境デザイン賞、日本音響学会環境音響研究賞など。

斎藤賞・加藤賞・桜建賞

2018年度受賞作品の紹介

斎藤賞

共同住宅の小屋裏を介した伝搬音の減衰特性に関する実験的検討

遊佐大智(理工建築/修士論文/現・大成建設) 指導/富田隆太教授、井上勝夫特任教授

2017年6月の建築基準法施行令第112条2項の改正により、「共同住宅や長屋を除いて『強化天井』を用いることで、防火上主要な間仕切壁を小屋裏等まで達せしめなくて良い」とする規制緩和が行われた。これが共同住宅などに拡張すれば、新たに小屋裏回路系が住戸間遮音性能に影響を及ぼすことが示唆される。本研究では、共同住宅を対象とし、小屋裏回路系が室間遮音に及ぼす影響の把握および小屋裏の伝搬減衰量を定量的にとらえることを目的とした。まず、小屋裏界

壁を撤去した場合、断熱材を敷設すると室間遮音に影響を及ぼさないことを実験的検討で明らかにした。また、小屋裏空間では拡散仮定が成り立たないことを示した。次に、天井裏に断熱を目的として全面敷設したグラスウールを吸音材として利用し、小屋裏空間の非拡散性を向上させることで、高い減衰効果が得られることを示した。さらに、小屋裏内部の非拡散性や反射音の指向特性、固有振動などの要素を考慮すれば、定量的に伝搬減衰量をとらえることができた。

RC造建物群に対する地震損傷評価体系の再定義

-地震損傷に及ぼす影響因子の究明と新たな枠組の提案-

市川大真(理工建築/修士論文/現・大成建設) 指導/長沼一洋教授、田嶋和樹准教授

国内におけるRC造建物の地震損傷評価手法は、耐震診断の考え方に基づいているが、地震動特性の影響が十分に考慮されていない。この問題点に際して、海外で提案されている「損傷スペクトル」という手法に着目した。この手法は、入力地震動によってRC造建物に生じる損傷程度の概略値を把握することができる。しかし、この手法は簡便性を重要視しており、多くのパラメータがさまざまな仮定条件により簡易的に設定されているなど、評価精度に関す

る問題点が指摘されている。そこで、損傷スペクトルに基づく損傷評価の問題点と適用限界を明らかにした上で、地震被害調査報告や骨組モデルによる解析的検討を実施し、理論的な根拠に基づいた合理的なパラメータの再定義を試みた。

その結果、過去の地震被害状況と精度良く対応することが確認された。また、想定地震動に対する地震被害想定も実施し、地域レベルの実情に即した地震被害を予測できる可能性を示した。

海軍建築における柔構造理論と実践に関する研究

山中美穂(生産工/修士論文/現・東電設計) 指導/藤本利昭教授

1923年に発生した関東大震災の後、大正末期から昭和初期にかけて「柔剛論争」と呼ばれる論争が繰り広げられた。柔剛論争とは、佐野利器、武藤清ならびに真島健三郎らによって、建物の水平剛性を高めた剛構造と、水平剛性を低くした柔構造のどちらが地震に対して優れた性能を有しているのかを論じたものである。これまで柔構造理論は、実際の建物の設計には応用されていないものと考えられてきたが、近

年の研究によりその理論が設計に応用されていることが明らかになってきた。そこで本研究では、柔剛論争の歴史的背景と真島博士が提案した柔構造理論の概要および例題建物についての考察を行った。さらに当時の柔構造建物のうち、在日米海軍横須賀基地内に実存する「旧横須賀鎮守府長庁舎」について常時微動測定を行い、その振動特性を明らかにすることで、当時の柔構造理論と実施設計の差異を明らかにした。

ポリマーセメントモルタルの性能評価のための各種試験条件及び調合因子としてのポリマー混入率の検討

西田電(工/修士論文/現・清水建設) 指導/出村克宣教授、齋藤俊克専任講師

本研究では、ポリマーセメントモルタル(PCM)の性能評価のための各種試験条件および調合因子としてのポリマー混入率の検討を目的に、①圧縮強さ試験条件の検討、②接着強さ試験および中性化試験条件の検討、③性能評価のための調合因子としてのポリマー混入率に関する実験的研究を行っている。その結果、PCMの圧縮強さおよび接着強さ試験条件について、PCMの試験方法に関する日本工業規格(JIS)とその

他の関連JIS規格、他学会の規準や規格との整合性を図るための基礎資料を提供し、また仕上材としてのPCMの中性化抑制効果を明確にしたことで、今後のJIS改正に貢献できると考えられる。さらに、ポリマー混入率がPCMの曲げ強さ、圧縮強さ、透水量および耐久性に及ぼす影響因子を導き、ポリマー混入率を指標とした各種性能の推定式を提案しており、PCMの新しい調合設計法の確立に寄与できると考えられる。

加藤賞

飛砂による地形変化を考慮した海浜地形変化予測モデルに関する研究

横田拓也(理工海建/修士論文/現・日大大学院博士後期課程) 指導/小林昭男教授、野志保仁助教

風による砂移動(飛砂)は、海浜近傍の住居の埋没や道路への堆積という海洋建築環境の維持、ならびに海岸保全の土砂管理において重要な管理対象である。この環境管理を合理的に行うためには、波によって海浜に打ち上げられた土砂が風によって飛散するという現象、すなわち波による遡上限界(バーム頂)までの地形変化とそこから陸側の飛砂による地形変化という、一連の海浜変形の現象を一括して解析する技術が必要であるが、これは未開発であった。

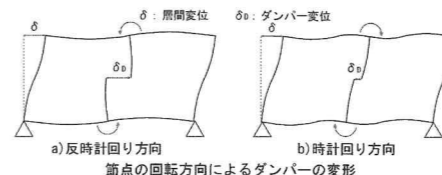
本研究では、波による海底面からバーム頂までの地形変化には、バグノルド概念に基づく地形変化モデルを用い、これにより海浜に堆積した土砂の移動には、セルオートマトン法による飛砂モデルを用い、両者をバーム頂で接合するハイブリッド型のシミュレーションモデルを研究開発し、その妥当性を実現象との比較により検証した。この成果は、海洋建築環境の維持管理技術の向上に貴重な貢献をなすものである。

RC造間柱型ダンパーを設置した制震構造建物の制震効果に関する研究

小山大樹(理工海建/修士論文/現・松田平田設計) 指導/北嶋圭二教授、中西三和元教授、安達洋名誉教授

本研究は、RC造間柱型ダンパーを設置した制震構造建物の制震効果を明らかにすることを目的としたものである。間柱型ダンパーは、間柱部の変形や節点の回転の影響によりダンパー変位が低下してしまう。節点の回転方向は梁と間柱部の剛性により決定され、間柱部やフレームがRC造である場合、ひび割れや降伏による剛性低下により、これらの関係はよ

り複雑になる。本研究では、まず、解析スタディを行い、RC造間柱型ダンパーのエネルギー吸収性能を把握し、次に、これらの検討を踏まえた上で制震設計スタディを実施した。検討の結果、RC造間柱型ダンパーを設置した制震構造建物では、ダンパーおよび間柱部の耐力と剛性が制震効果に大きな影響を及ぼすことを明らかにした。



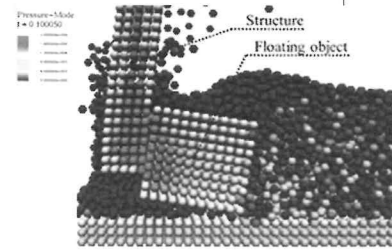
MPS法の弾性体モデルを適用した構造物の津波漂流物衝突時の弾性応答解析に関する基礎的研究

村田大地 (理工海建/修士論文/現・日立造船)
指導/居駒知樹教授、恵藤浩朗准教授、相田康洋助教、増田光一特任教授

本論文は、流体・浮体・構造物連成が実現できるMPS法の解析手法を開発し、津波漂流物の衝突現象に適用できることを示した。構造物にMPS法の弾性体モデルを適用した際に発生する数値計算上の問題点とその解決方法を、パラメータチューニング方法も含めて明らかにした。

左図は、水槽実験を再現した津波漂流物の衝突シミュレーションのスナップショットを示す。

本手法は、津波防災の発展に寄与するとともに、さまざまな形式の構造物が再現可能になれば、津波防災のための数値解析手法として広く利用されると期待できる。



桜建賞

子どもの動作による加振力の実験的検討

中村明日香 (理工建築/卒業論文/現・藤田建装)、一柳薫 (同左/現・日大大学院)
指導/富田隆太教授、井上勝夫特任教授

近年、集合住宅や複合施設において音環境に関する問題が数多く発生している。その原因となる固体音発生源には、人の動作や物体の落下、交通振動などがあげられるが、現在その具体的なデータはまとめられていない。そのため設計段階では、動作や物体の加振力を標準重量衝撃源によって仮定しているが、それでも音が気になる場合があることから、さまざまな種類のある加振力の中にはこれでは対応しきれないものがあるとわかっている。

そこで本研究は、実際に苦情が出ている

子どもの動作による加振力に着目し、3歳児から5歳児96人を対象とした歩行・小走り・飛び跳ねの加振力を、靴と靴下履きの2パターンで測定した。

成人の歩行衝撃に比べると子どもの歩行衝撃は小さいため、あまり重要視されておらず、100人規模のデータの検討は見当たらなかった。しかし、子どもは室内でも成人歩行より衝撃力暴露レベルの大きい小走りや飛び跳ねを行うため、保育所との複合施設や集合住宅では、有用なデータになると考えられる。

単一の切り欠き加工を施した6本組木に関する実験的研究

-6本組木の接合部の履歴性状及びフィーレンディール架構への適用性について-
桑田幹也 (理工建築/卒業論文/現・日大大学院) 指導/岡田章教授、宮里直也教授、廣石秀造助教

木造の接合部は金物を用いる方法が一般的だが、木材の再利用の観点からは負の因子になると考えられる。一方、伝統構法では木材同士を切り欠き、金物を用いない接合が可能であるだけでなく、構造的には木材同士のめり込みによるエネルギー吸収も期待される。

以上の背景から、本研究では組木の可能性に着目。既存の組木は、3本組木、6本組木に大別され、建築には施工性から3本組木が多く用いられている。しかし、各軸

2部材で構成される6本組木は、曲げや軸力をより多く負担できると考えられる。

本研究では、単一の切り欠きで構成された改良型の6本組木を提案するとともに、建築への適用を検討した。実験は、提案組木の接合部および、提案組木を接合部に利用したフィーレンディールの梁架構を対象とした載荷実験を行った。

その結果、提案組木が靱性に優れ、建築への適用性を有することを把握した。



6本組木のモデル

屈曲ケーブルにより構成されたHP型ケーブルネットの基本的構造特性に関する研究

野呂航 (理工建築/卒業論文/現・日大大学院) 指導/岡田章教授、宮里直也教授、廣石秀造助教

ケーブルネット構造は、吊り・押えの二方向ケーブルによるHP曲面が基本形態であり、優れた構造合理性を有することが特徴であるが、世界的に適用例が少ない。その理由として、交点金具の複雑な形状や施工の困難さによるコスト高があげられる。

本研究では、本構造について、交点部の簡略化・コスト削減・施工性の向上を期待し、リング型交点金具を提案する。本交点金具は、交点部にリングを用いケーブルを屈曲させることで格子を構成する。また、

交点部で滑りが生じるため、滑り性状を把握することが不可欠となる。

以上より、本構造の基本的構造特性および滑り性状の把握を目的に実験的検討を行った。まず全体モデルの載荷実験により、本構造の変形挙動を把握した。次に、交点部モデルの載荷実験により、初期張力と静止摩擦係数の関係を把握した。

この結果、適切な初期張力を導入することで、提案したディテールを有するケーブルネットの可能性が把握された。

日本におけるカトリック教会の展開に関する研究

-初期教会建築の地域分析に基づく考察-
大西里佳 (理工建築/卒業論文/現・東京芸術大学大学院) 指導/大川三雄特任教授

世界遺産に認定された長崎を中心とするキリスト教会群のほとんどは、イエズス会士のザビエルによってもたらされたカトリック系の教会である。一方、明治に入り禁教が解かれてからの日本では、北米とカナダを中心とするプロテスタント派の活動の方が圧倒的となっていた。会派ごとの個別的な活動が中心のプロテスタントとは異なり、カトリックはバチカンを頂点とした組織的な活動を特徴としているが、居留地から各教区へと展開していったカトリック

の組織的な活動内容の実態は意外に知られていない。

本研究は、文献資料の発掘と現地調査によって、カトリックの布教活動の地域的な広がりを解明することを目的としたもので、従来、ほとんど注目されてこなかった地域での活動内容が今回の調査によって明らかになった。

この研究では全体像の把握に焦点がおかれているが、個別事例の分析により、さらなる成果が期待される分野である。

マレーシア旧市街地に存在するショップハウスの空間特性に関する研究

-ショップハウスとカキリマに着目した研究調査-
田邊勇輝 (理工建築/卒業論文/現・日大大学院) 指導/重枝豊教授、加藤千晶助手

ショップハウスとはマレーシアの建築形式の名称である。1、2階建てが多く、店舗兼住宅と専用住居が存在する。庇を突き出したカキリマと呼ばれる下屋空間を有しているのが特徴である。現在、マラッカのショップハウスの研究の進歩は芳しくなく、ショップハウス特有のカキリマについての調査や研究、多種多様なショップハウスの形態的特徴やマラッカ特有の建築様式などの詳細な分類による調査や考察はみられない。

本研究は、マレーシアの古都マラッカのショップハウスを明らかにすることを目的としている。実測や文献調査から、現状のマラッカの街並みの把握やショップハウスの詳細な立面構成および平面構成の考察を行った。その結果、これまで詳細な調査が行われていなかったマラッカのショップハウスおよびカキリマの用途や構成について、明らかにすることができた。これらの結果は、マラッカのショップハウスの基礎資料として重要なものになると考える。

ふるまいの風景 -Fragments of architecture-

小川朋大 (理工建築/卒業設計/現・日大大学院) 指導/田所辰之助教授

「建築を洋服のように考えてみる」ことはできないだろうか。暑くなったら、上着を脱いで窓を開ける。そうすると、そこから心地の良い風が入ってくる。寒くなったら、日向に移動してうとうとする。建築の産業化は、環境との相互関係性によって生じる「ふるまい」には見向きもせず、「暑い」、「寒い」だけの結果を重要視した。いつの間にか、建築は人の手から離れ、遠くへ行ってしまったように思う。

東京には、環状に木密地域が多く分布している。計画地とした新宿・落合エリアは、染色産業でかつて栄え、現在も染物工房が残る。染物工房での染色の工程を設計の中に組み入れ、地域住民たちの「ふるまい」に重ね合わせて視覚化、空間化していくことを提案する。

私は、その提案を通じて、一つひとつは微弱だが、集まることで日常的風景をつくり出す建築のあり方を伝えたい。

物流機能維持に向けた港湾津波ハザードマップ開発に関する基礎的研究

細谷昂 (理工海建/卒業論文/現・フジタ)

指導/居駒知樹教授、惠藤浩朗准教授、相田康洋助教、増田光一特任教授

本論文では、津波による係留船舶の被害やコンテナの漂流被害に着目し、災害時の被害状況を想定するツールとして、物流機能維持に向けた港湾津波ハザードマップを開発した。

4段積みコンテナの崩壊条件を組み込んだシミュレーションを行い、コンテナの最

終漂着個数を格子で区切り分けして表示している(左図)。これは発災後の航路啓開作業を行うための基盤となることから、社会的にも重要である。

今後、津波やコンテナの条件を変えた系統計算による被害想定を検討するなど、さらなる研究の発展も期待できる。

スラブ付 RC 造十字形柱梁接合部の多数回繰返し載荷実験

新井義友 (理工海建/卒業論文/現・大和ハウス工業)、今津祥地郎 (同左/現・日大大学院)

指導/北嶋圭二教授、中西三和元教授、安達洋名誉教授

RC 造十字形柱梁接合部の多数回繰返し載荷実験を実施した。実験は、柱梁曲げ強度比(1.4 または 1.9)とスラブ付きか否かを実験変数とした、計4体の試験体に対し実施した。各試験体とも部材角 1/50rad までは梁曲げ降伏破壊の様相を呈していたが、部材角 1/30 rad 以降の大変形時には、

本来、柱主筋が降伏しないはずの柱梁強度比が高い試験体も含め、すべての試験体が接合部降伏破壊に至った。部材角の大きさに応じ時々刻々変化する、試験体のひび割れ状況や鉄筋のひずみ状況を詳細に観察・計測し、接合部降伏破壊に至るまでの破壊経過を把握した。

茨城県酒沼親沢鼻における湖浜変形の要因とその影響に関する研究

関根雅人 (理工海建/卒業論文/現・日大大学院)、馬場淑弘 (同左/現・五洋建設)

指導/小林昭男教授、野志保仁助教

湖浜は海洋レジャーの場として重要な環境要素であるが、侵食による喪失が進んでおり、その回復は重要な課題である。特に、地震などによる地盤沈下の影響は、外洋に面する海浜に比べ大きく影響を受ける。この場合、波による侵食と異なり、変化が急激に起こり、侵食問題が増大する。そこで、本研究では茨城県酒沼湖の北西に位置する

親沢鼻を対象に、地盤沈下後の湖浜変形のモニタリングを実施した。

その結果、湖浜の東側ではさらに侵食が進行し、西側では一部堆積していることが観測された。解析の結果、侵食対策として設置された親沢鼻先端部の突堤の天端が、地盤沈下により低下したことによって、東側の砂が突堤の天端を超えて西側に流出し

ていることが明らかとなった。対策として、地盤沈下の影響を考慮した上で、突堤の天

端の嵩上げと養浜をすることで、湖浜を回復させることが可能であることを示した。

伊是名集落の石垣築造におけるマニュアル作成と実証

宮田諒 (生産工/卒業論文/現・日大大学院) 指導/篠崎健一准教授

沖縄県伊是名島伊是名集落の北側にある後辺くしひんと呼ばれる地区には、珊瑚の石垣や赤瓦の屋根や福木で構成される琉球らしい景観が現在も残る。石垣は、沖合の屋那覇島周辺からサバニと呼ばれる小さな木造船に珊瑚石を入れて運び、集落の人びとが互いに力を貸し合い石積みを行ったが、現在は行われていない。

そこで、口伝で伝わる石積み技術を、石垣 WS の経験よりマニュアルに表記して、石積みの全体の流れと石積み技術を把握す

ることを目的とした。

マニュアルは、石積み未経験者の手引きとなるように、準備から片づけまでの一連の流れが一目でわかるよう作成した。石垣 WS のもっとも重要な気づきは、崩れている石垣を部分的に修復する場合に、1日ですべての石積みの全工程が終わる可能性を実証できたことである。今後は、人力のみで石垣築造を実行する方法をマニュアルに記載して、崩れている石垣を部分的に修復する方法を明らかにする必要があると考える。

給水塔の保存に関する研究

笹谷瑞範 (生産工/卒業論文/現・第一設備工業)、佐藤峻 (同左/現・建築工業) 指導/三上功生准教授

給水塔とは、揚水ポンプで高置水槽に水を貯め、重力により団地内住戸などへ水を供給する建物である。給水塔の数は、耐震性の問題や給水技術の発達により、減少傾向にある。今後増加すると予想される解体・廃棄作業では、多くのエネルギーが消費され、結果的に地球温暖化につながると考える。そこで本研究では、給水塔を保存する一手段を導くことを目的としたフィールド

および、アンケート調査を行った。

その結果、大容量の高置水槽をもつ給水塔は、リノベーションにより保存できる可能性が高いといえる。一方、左写真のような塔型の給水塔は、外壁に絵を描いて団地のシンボルとして残すことに賛同の意を示す住民の割合が多かったことから、「外壁のペイント」が保存手段のひとつになり得る可能性が示唆された。

“あたりまえ”の風景 -生活に寄生する地域活動の場-

小山佳織 (生産工/卒業設計/現・日大大学院) 指導/岩田伸一郎教授

東京都大田区。生まれ育ったこの地で私は12年間にわたり地域活動を行ってきた。地域の子どもたちと、さまざまな感性を育む未来を見据えた活動である。まちを支える底力となる地域活動。しかし、どれだけの人間がこの名脇役たちの活躍を知っているのだろうか？ 今、裏舞台に徹していたこれらの活動にスポットを当て、生活のす

ぐ隣へ根づく地域活動を目指した。

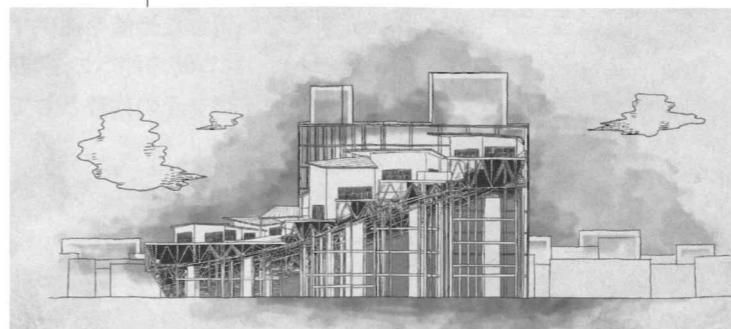
東京都大田区雑色。買い物に出る人びとを対象とし、駅すぐそばのOKストアの増築として敷地を設定する。雑色商店街とOKストア。競合相手となるこの2つの商業空間を生活動線のひとつにつなぎ直すように、商店街から続く道を上げて新たな動線をつくる。上昇した地盤には、まちに溶け込む風景が広がり、下には地盤を支える地域活動施設が広がる。縁の下の力持ちがまちを支えている「地域力」の様子を可視化し、まちの象徴となる。“知らない”から“あたりまえ”へ。私たちの居場所確保をかけたメッセージを建築する。



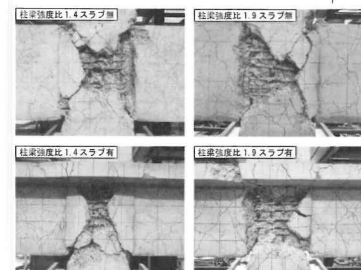
石積みワークショップ



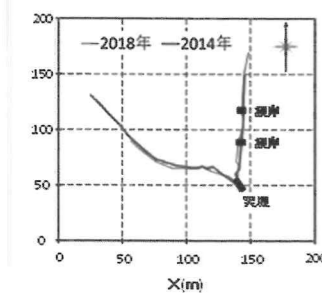
多摩川住宅給水塔



コンテナの漂流被害をあらわしたハザードマップ



各試験体の最終破壊状況



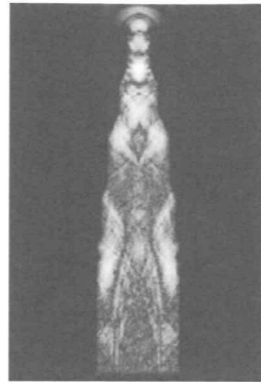
酒沼親沢鼻の汀線形状の変化

クメール遺跡祠堂内の不思議な音に関する研究

角田空 (生産工/卒業論文/現・東洋熱工業) 指導/塩川博義教授

本研究では、カンボジアにあるクメール遺跡のひとつであるプレループ遺跡に着目し、実際にプレループ小祠堂内の胸を叩いたときに鳴る不思議な音を録音して、音響分析し、さらに差分法による音響数値計算を用いて、不思議な音の仕組みを解明した。

その結果、プレループ遺跡小祠堂内の胸を叩いて得られる主成分の音と小祠堂の高さ方向における共鳴音が一緒に鳴ること、不思議な響きを構成していることを明らかにした。



小祠堂における音の波動シミュレーション

箱入り娘の夜

長瀬紅梨 (生産工/卒業設計/現・三井住友建設) 指導/篠崎健一准教授

私の家は、私がいちばん安心できる場所。私の部屋は、私をいちばん受け止めてくれる場所。しかし、ある日の夜には、家と部屋は私を閉じ込める檻になる。

私が体験した3つの夜を軸に、家と部屋の奥に社会をもつ洞窟の家を提案する。洞窟の家は、入り込む外部、奥まって広がる住戸、奥の洞窟空間の3つの要素から成り、住戸の奥の寝室にある、にじり口ほどの大

きさの穴から洞窟空間に出る。ジャバラ状の形状からできた洞窟空間には多様な空間があり、それらが立体的につながって階段で巡ることができる。上の方に空いた穴から入ってくる環境に身を任せ、下の方にある暗闇では自分自身を見つめる。

家の中で洞窟空間に身を置き、日常から離れて何かの内面を見つめるとき、心がふっと軽くなる。

地図にない建築 -内海を漂う方舟-

兵頭秀子 (工/卒業設計/現・三井デザインテック) 指導/浦部智義教授

本設計で対象とした瀬戸内海の島嶼部は、温暖な気候・豊かな自然・美しい景色・多様な食文化といった魅力と同時に、防災・過疎・高齢化など、さまざまな課題も抱えている。そこで、船で曳航し可動しうる人工島(メガフロート)を利用した、移動す

る建築群を設計し、内海の産業や観光、暮らしに資する、従来にない新しい公共的な空間を共有することで、さらなる魅力の向上と、上述したさまざまな課題に応えることを目指した。

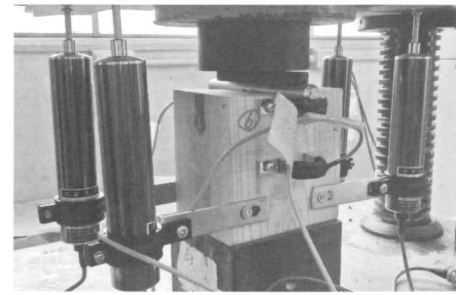
具体的には、広島県竹原と周辺島嶼を選定し、盛んな牡蠣養殖による大量のごみの処理施設の共有や加工場・市場などの関連施設を各フロート上に形成するなどである。また、フロート同士の接合・分離・海岸との間にできる緩衝空間や異機能の複合は、従来にない新たな価値を提供する。なおフロートは、災害時の沖への避難も助け、災害後も交通インフラの代替としても機能する。

鋼板挿入ドリフトピン接合による CLT パネルのせん断耐力に関する研究

赤羽聖明 (工/卒業論文/現・日大大学院)、川田寛人 (同左/現・ダイワハウス工業)、菅野信 (同左/現・福島製作所)、菅野大輔 (同左/現・福島キャンノン) 指導/野内英治准教授

2016年春にCLTパネル工法に関する関係法令が整備され、日本でも欧州で開発されたCLTパネル(直交集成板)の本格的な普及が見込まれるようになった。しかし耐震構造要素として考えた場合、その実験的研究は未だ実施例が少ないのが現状である。

本研究では、幅はぎ接着した3層3プライCLTパネルの圧縮実験によるヤング係数の算出、ドリフトピンを用いたCLTパネルのめり込み剛性や支圧強度を明らかにするとともに、幅はぎ接着していないCLTパネルとの比較を行い、CLTパネルの耐震要素としての基礎資料を求めたものである。



CLTパネルの圧縮実験

ポーラスコンクリートの性能評価

-粗骨材岩種が圧縮強度・静弾性係数に及ぼす影響、並びに各種静弾性係数推定式の適用性-
武田昌也 (工/卒業論文/現・日大大学院) 工藤陸良 (同左/現・田中土工工業)
指導/出村克宣教授、齋藤俊克専任講師

ポーラスコンクリートは、粗骨材間を、結合材としてのセメントペーストまたはモルタルで充填して所要の空隙率が得られるように調合設計を行うため、その圧縮性状に及ぼす粗骨材岩種の影響は大きいと考えられる。そこで本研究では、岩種の異なる2種類の粗骨材を用い、目標空隙率10~30%としたポーラスコンクリートの圧縮強度および静弾性係数を明らかにした上で、普通コンクリートに対して提案される各種静弾性係数推定式の適用性を検討した。

その結果、ポーラスコンクリートの圧縮強度と静弾性係数の間には高い相関性が認められる。一方、ポーラスコンクリートの空隙率の変化は単位容積質量の変化として現れることから、単位容積質量および圧縮強度を因子とする普通コンクリートの静弾性係数推定式として、日本建築学会の「鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説」に示されているNew RC式および1991年度版の推定式が、ポーラスコンクリートに対しても適用できることを明らかにした。

東日本大震災前後の福島県で採られた建築設計者選定方式に関する研究

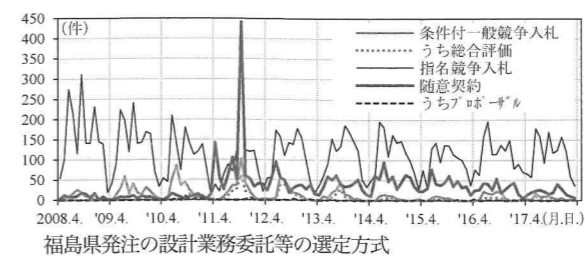
後藤寛尚 (工/卒業論文/現・東京電力ホールディングス) 指導/速水清孝教授

建築設計者をどのように選ぶのかについては長く議論が交わされ、公平性・透明性確保の点から、90年代より国がプロポーザルを推し、近年、首都圏ではそれが浸透してきた。一方、地方ではどうか。かつてはほぼ入札だったにしても、東日本大震災後にはJIAの求めなどもあって変わるきっかけはあったはずである。そこで本研究で

は、福島県の公共団体の設計業務発注の実態を探った。

その結果、福島では未だに入札が主流で、プロポーザルは震災前後を通してほぼ横ばいであり、震災後にはむしろ発注者にとって便利な随意契約が増えていた。これは全国的には遅れた傾向である。

それでも、地元設計協同組合が随意契約で得た後、組合主催でプロポーザルを行う事例も現れている。これは、プロポーザルに不慣れた市町村が、それでも公平かつ透明なかたちでより良い設計者を選ぼうとする意志の表れであり、変化の兆しととらえることができる。



福島県発注の設計業務委託等の選定方式



第二師団歩兵第六十五聯隊 -会津のあゆみ-

佐藤友貴子(工/卒業論文/現・日大大学院) 指導/山岸吉弘専任講師

本人の興味関心から、また偶然の出会いから、「第二師団歩兵第六十五聯隊」という特殊なテーマに取り組むことになり、会津若松に足繁く通うだけでなく、新潟や青森まで遠征して調査し、資料・文献を渉猟した結果の力作である。

はじめは着地点がまったく見えなかったものの、佐藤君のセンスと努力で(それだけでなく楽しみを得ながら)、徐々に研究が進展し、最終的には至極納得のいく結論を導き出していることは贅辞に値する。

若松市(当時)は聯隊の誘致を熱望し、周到な準備を進めていたこと、兵営の建設が決まり、多くの人びとが会津へ移入することで産業が振興したこと、それだけでなく、明治維新で賊軍とされた地元は若松の地に官軍が置かれることを強く望んでいたこと、などを明らかにしている。

会津若松の城郭脇には兵営の遺構である「将校集会所」が無人生となり佇んでいる。歴史ある建物に光を当てることもまた、研究の大切な役割である。

JMAM -日本近代建築博物館-

須賀友美(短期大学部/卒業研究・設計/現・生産工建築工3年) 指導/矢代眞己教授、石田優助手

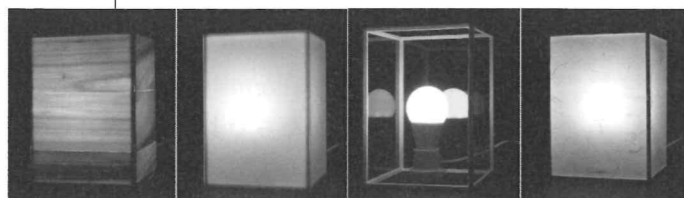
図面、模型、文書、写真などの建築資料は、建築を考えるための貴重な文化遺産となるが、わが国ではこうした資料を保管する場所に乏しく、近現代建築の資料については劣化、散逸、海外流出の危機にも直面している。そこで、明治以降の建築資料をアーカイブし、未来へと継承する施設を計画した。ここでは、展示しない作品や資料は収蔵庫に保管せず、アーカイブとして建築学生や研究者に公開できるようにした。これを特徴づけるため、門型架構の隙間から元号ごとに色分けしたアーカイブの箱を挿入し、展示空間に吊るし、収蔵品の増大に応じて追加・増設できるようにした。ピロティでは、ワークショップなどが行われる楕円空間を垣間見ること、現在の建築の動向がわかる。その上に展示空間、屋上空間と積層されるが、各フロアが性質の異なるプロムナードを成している。高層の研究棟は、4本の壁柱にワッフルスラブを重ね、フレキシブルな空間を可能とした。

照明のシェード素材に着目した物理的変化と心理的影響

荒井美咲(短期大学部/卒業研究・論文/現・理工建築3年) 指導/羽入敏樹教授

照明のシェード素材による光環境への物理的・心理的影響について、実験を行って検討した。和紙のようなシェードとして良く用いられる素材だけでなく、スチレンボードや塩ビ板など16種類の素材につい

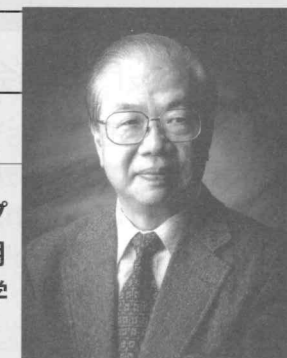
て実際に照明を作成して比較検討した。物理的影響については「照度」「色温度」「輝度」の測定を行い、心理的影響については「快適性」「その照明に興味を惹きつけられるか」「好きか」「明るさは丁度良いか」の4項目についてSD法で評価してもらい、さらに最も好きな照明をひとつ選んでもらった。その結果、和紙は輝度のばらつきが少ないため落ち着きがあると高評価を得た。スチレンボードは照度・輝度ともに低くなるが高評価となった。全体的に、透過光が拡散される素材は、落ち着きや暖かみを感じるため高評価となることがわかった。



シェード素材の違いによる照明の変化。左からパルサ、スチレンボード、塩ビ板、和紙

追悼

若色峰郎先生を偲ぶ



「近代建築」2004年1月号表紙より

1960年代より40年以上理工学部建築学科で教鞭を執り、船橋キャンパスのプラザ習志野や理工スポーツホールなどを設計された若色峰郎先生が、昨年11月に逝去された。享年81歳であった。長く若色先生の研究室で、ともに研究、学生指導にあたった渡辺富雄先生に、悼むことばをよせていただいた。

若色峰郎先生は、昨年の11月25日に81歳の生涯を終えられました。研究室ではOBを中心に30年ほど前から、先生のご趣味であったゴルフの大会と忘年会を毎年続けていますが、先生は5~6年前から参加されなくなっていました。一昨年、先生の恩師である故小林美夫先生(日本大学名誉教授)のご葬儀の際にお目にかかったのが最後で、そのときはお元気な様子でした。その後、急激に体調を崩されたようで、今年2月の訃報は大変ショックでした。

先生は、1964(昭和38)年に本学の大学院修士課程を修了し、そのまま大学に残られ、2006(平成18)年に定年退職されるまでの44年間、建築計画・設計の分野での教育、研究、ならびに本学の運営に尽力されました。

研究室の名簿では、1968(昭和43)年から学部551名、大学院は博士課程も含めて101名の卒業・修了生がいます。卒研、修論の指導では、夜遅くまで辛抱強く学生さんたち一人ひとりの話を聞いて聞いておられました。

学生さんが帰った後に、疲れたような顔をされて「渡辺、待たなければダメだよ」と何度も聞かされました。これにはいろいろな意味が込められていると思いますが、教育者としての先生の姿勢、人柄が良くあらわれていることばだと思います。

研究については、「私の研究歴」(理工サーキュラー137号2006)に寄稿されているので、詳しくは紹介しませんが、研究テーマは、先生が助手時代に故小林先生を中心にして、斎藤公男先生(現桜建会会長)らと関わられた岩手県立体育館や秋田県立体育館での経験から発したもので、当時の建築計画分野では取り上げられていなかったスポーツ施設の分野に、最初に取り組みされました。

設計では、1960年代の船橋キャンパス草創期からの数々の施設や文理・経済学部の施設設計にも関わって来られ、BCS賞、東京建築賞などの建築賞を受賞されています。学生さんたちの調査研究をベースとする論文の指導では、「設計とどう結びつくの?」と常に話されていました。建築家としての先生の建築計画研究に対するスタンスを見ることが出来ます。また、建築設計の実務を通して私たちに多くのことをご教示くださいました。船橋キャンパスの変遷は、「駿建」(2018.Apr. Vol.46 No.1)に紹介されました。

建築学会、建築家協会などでは数々の役員、委員を務められましたが、紹介されていないもののひとつに、学会の地域施設小委員会があげられます。最初の20年ほどの間は主要メンバーとして尽力され、今年で37年目を迎えます。この間に研究室でも、先生のご指導の下で十数編の論文を投稿してきました。

先生は、「学部3年のときに友人たちと学会のコンペに応募し、多くの大学院生に交じって全国2等に入選したことがひとつのきっかけになった」と話されていましたが、設計を目指す学生さんのためのこうした参加の場を、JIA、理工学部、桜建会の行事として、位置づけることに尽力されました。

JIAの大学院修士設計展の第1回は東京都内だけの8大学と記憶していますが、昨年の17回目の展示会はタワー・スコラで開催され、26大学からの参加へと膨らんでいます。学部の行事としては、全国工業高校建築設計競技を復活させ、今では、幹事を理工、生産工、工、短期大学部と持ち回りで担当し、普通高校の生徒も応募できる設計競技へと発展してきています。桜建会では、学生のための設計コンクールを1984年にスタートさせ、名称を変えながらも継続的に開催されています。建築講座の先駆けとなるNU建築フォーラムの立ち上げなどにも尽力されました。

恒例の研究室の懇親会では、特にアルコールが入ったときに学生さんたちと和やかに話されている先生の笑顔を忘れられません。11月には研究室のOBたちが一周忌に合わせて偲ぶ会を企画しています。

長年にわたる厳しくも温かいご指導に感謝するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

渡辺富雄/元理工学部建築学科教授

事務局だより

令和元年度桜門建築会総会報告

令和元年度総会は、本年5月29日、東京お茶の水の「東京ガーデンパレス」で行われ、出席者は130名であった。はじめに斎藤公男会長

のあいさつがあり、次いで各委員会からの報告、日本建築学会の選挙報告、監査報告があった。続いて令和元年度の事業計画が審議された。ま

た、総務委員会から本年度役員案が提出され審議された。これらは拍手をもって承認され、総会終了後は懇親会が開かれ、盛会に終わった。

平成30年度観桜会報告

今年是小石川後楽園涵徳亭が改修工事のため、3月29日に六義園で観桜会を行った。花見後、東洋文庫オリエント・カフェで懇親会を行った。出席は39名であった。

「NUアート倶楽部」第7回アート展を開催

会員相互の親睦をはかるために設立した「NUアート倶楽部」(略称/NAC)の第7回アート展を、10月21日(月)～26日(土)まで、理工

学部駿河台キャンパス1号館5階のCSTギャラリーで開催する。開催時間は、12時～18時まで(最終日26日は15時まで)。

お詫びと訂正

会報114号の斎藤賞・加藤賞・桜建賞受賞者一覧の中で、記載の間違ひがありました。右が正しい氏名と論文名、指導者名となります。受賞者の方々、先生方にたいへんご迷惑をおかけしましたことを、心よりお詫び申し上げます。

P 10 の加藤賞受賞者の氏名と論文名

横田拓也「飛砂による地形変化を考慮した海浜地形変化予測モデルに関する研究」指導/教授・小林昭男、助教・野志保仁
小山大樹「RC造間柱型ダンパーを設置した制震構造建物の制震効果に関する研究」指導/教授・北嶋圭二、元教授・中西三和、名誉教授・安達洋
村田大地「MPS法の弾性体モデルを適用した構造物の津波漂流物衝突時の弾性応答解析に関する基礎的研究」指導/教授・居駒知樹、准教授・惠藤浩朗、助教・相田康洋、特任教授・増田光一

P 11 の笹谷瑞範さん、佐藤峻さんの(生産工/卒業論文)の指導者名

「給水塔の保存に関する研究」指導/准教授・三上功生

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務先 (平成31年2月1日～令和元年6月7日) 132名

熊井直哲/工-H22
能條浩之/理工海-H2/戸田建設(株)
眞柄築毅/理工建-38
廣瀬正行/理工建-41
林豊/理工建-42
尾形亨/理工建-43/(株)オガタ
高山誠/理工建-44
畠山厚/理工建-44
栗原勝一郎/他学科-45/栗原製作所
柴田保夫/理工建-45
林好彦/理工建-45/友和設備工業(株)

村瀬正一/理工建-46
市川敏廣/理工建-47/(株)建築構造センター
熊谷平一郎/理工建-47/(株)熊平建築設計事務所
清水恵一/理工建-47/(株)清水組
鈴木宏昌/理工建-47
中村洋行/理工建-47/(株)コンステック
山崎清司/理工建-48/山崎建設工業(株)
酒井章/理工建-49/酒井築工学研究室

根本雅祥/理工建-49
日吉稔/理工建-50/設計倶楽部
細井一雄/理工建-50
梅野裕/理工建-51/吉豊産業(株)
金森徳二郎/理工建-51/(株)桂設計
田村茂智/理工建-51/(株)カラム建築構造事務所
高柳講一/理工建-52/(株)高柳建築設計事務所
齋藤一/理工建-53/(株)タカミヤ
上村文二/理工建-54/太陽設計(株)

川原敏男/理工建-54/(株)渡辺建築事務所
高橋修/理工建-54/鹿島建設(株)
岩崎浩/理工建-55/岩崎構造設計事務所
内田美保子/理工建-55/TSP太陽(株)
辻正博/理工建-55/辻建設(株)
伊東俊一/理工建-56/(株)南勢建築設計
岩本弘幸/理工建-56/(株)パン・パシフィックシェアードサービス
植松繁樹/理工建-56/(株)望月商会
奥原剛彦/理工建-56/太陽工業(株)
駒井孝昭/理工建-56/(株)大林組
日野原康幸/理工建-56/西武建設(株)
山口章/理工建-56/日鉄興和不動産(株)
小田切公司/理工建-57/(株)シミズ・ビルライフケア
親松潔/理工建-57/(株)共栄商事
亀山憲一/理工建-57/学校法人進藤学園きよし幼稚園
駒井健弘/理工建-57/青森ひばショップ&住宅環境研究所 イアモク
佐川美浩/理工建-57/(株)加地和組
佐々木勝/理工建-57/(株)IMコーポレーション
高橋倍子/理工建-57
蛭川研造/理工建-57/大成建設(株)
大塚真吾/理工建-59/(株)大塚構造設計
木村秀寿/理工建-59/(株)神崎組
郷田哲雄/理工建-59/山口産業(株)
西谷隆之/理工建-59/清水建設(株)
茂木紀郎/理工建-59/大成建設(株)
品部浩司/理工建-60/大成建設(株)
谷口尚範/理工建-60/清水建設(株)
宮田勝利/理工建-60/三井住友建設(株)
山田裕司/理工建-60/TOTO(株)
大竹透/理工建-61/(株)日建設計
草間徳朗/理工建-61/草間構造設計室
近藤宏/理工建-61/(株)大林組
中川路勇/理工建-61/大成建設(株)
板屋剛夫/理工建-62/鹿島建設(株)

大澤正明/理工建-62/(株)大林組
鎌倉孝光/理工建-62/清水建設(株)
中野義達/理工建-62/大成建設(株)
久田基治/理工建-62/(株)構造設計工房デルタ
佐々木直幸/理工建-63/鹿島建設(株)
山本秀一/理工建-63/(株)竹中工務店
小野里匡章/理工建-H1/(株)松田平田設計
橋本雅博/理工建-H1/大成建設(株)
島村高平/理工建-H2/大成建設(株)
徐光/理工建-H2/(株)JSD
山岸俊之/理工建-H2/清水建設(株)
石田智彦/理工建-H3/(株)大林組
佐藤起司/理工建-H3/清水建設(株)
鈴木直幹/理工建-H3/(株)竹中工務店
松本敏勝/理工建-H3/清水建設(株)
森下修/理工建-H3/大成建設(株)
浅野孝/理工建-H4/(株)フジタ
佐藤雅志/理工建-H4/清水建設(株)
鈴木新吾/理工建-H4/鈴木新吾設計事務所
多田脩二/理工建-H4/千葉工業大学創造工学部
大貫浩嗣/理工建-H5/清水建設(株)
武藤肇/理工建-H5/(株)竹中工務店
渡邊朋宏/理工建-H5/(株)佐藤総合計画
三瓶智康/理工建-H6/(株)久米設計
田畑英樹/理工建-H6/日鉄エンジニアリング(株)
与那嶺仁志/理工建-H6/ARUP
今村柳輔/理工建-H7/戸田建設(株)
城戸隆宏/理工建-H7/日本郵政(株)
木村正豪/理工建-H7/(株)久米設計
小西泰孝/理工建-H7/小西泰孝建築構造設計
廣作利香/理工建-H7/大成建設(株)
小野塚真規/工-H8/(株)オノツカ
内藤輝一/理工建-H8/内藤鉄工(株)
金田崇興/理工建-H9/(株)竹中工務店
竹馬基人/理工建-H9/(株)三菱地所設計
中村伸/理工建-H9/(株)日本設計
村上隆/理工建-H9/(株)大林組

鈴木実/理工建-H10/神鋼鋼線工業(株)
山我信秀/理工建-H10/(株)NTTファッションティーズ
岡山信男/理工建-H11/(株)構造計画研究所
櫻井優貴/理工建-H12/(株)山下設計
矢口雅啓/理工建-H12/(株)NTTファッションティーズ
矢島卓/理工建-H12/東京製綱(株)
小倉史崇/理工建-H13/(株)竹中工務店
福島孝志/理工建-H13/(株)日建設計
金田隆浩/理工建-H15/金田建設(株)
宮下正人/理工建-H17/(株)三菱地所設計
吉野誠一/理工建-H17/(株)よしの
小山聖史/理工建-H18/大成建設(株)
豊嶋昭彦/理工建-H18/戸田建設(株)
森山卓也/理工建-H18/(株)竹中工務店
竹本孝輔/理工建-H19/(株)東畑建築事務所
山田達也/理工建-H20/(株)竹中工務店
安並卓嗣/理工建-H21/(株)竹中工務店
小笠原康介/理工建-H23/(株)JR東日本建築設計
松本良太/理工建-H23/(株)巴コーポレーション
柳瀬仁志/理工建-H24/清水建設(株)
磯部絵美里/理工建-H25
菅野貴行/理工建-H26/(株)竹中工務店
宮本悠平/理工建-H26/大成建設(株)
富澤彩菜/理工建-H27/(株)竹中工務店
宮内隼/理工建-H27/(株)佐藤総合計画
佐藤信治/理工海-61/日大理工学部
水野僚子/生産工-H10/日大生産工学部
田島正陽/理工建-49/(株)田島正陽建築事務所
石渡康弘/生産工-61/鉄建建設(株)
西塚正/理工建-H13/(株)西塚構造事務所
川名秀一/工-63/(株)長大
多賀桂助/理工建-44/(株)長大
坂尻悦子/他大学-60/桜栄商事(株)

賛助会員入会企業のご紹介

新規入会法人名 (平成31年2月1日～令和元年6月7日) 3社

塚本建設(株)

大和ハウス工業(株)

(株)長大

学部ニュース



トピックス①

◎岡田明也君(出村・齋藤研、2017年度修士修了)は、11月14日、2018年度日本建築学会大会(東北)学術講演会での研究発表「沖縄県の沿岸部に25年間屋外暴露したRC構造物外装仕上げ模擬供試体の防せい性」に対して、材料施工部門若手優秀発表を受賞した。

◎12月15日、市岡綾子専任講師は、福島県景観アドバイザーとして、平成30年度いわき市景観セミナーの講師を務め、「歩きたくなる温泉地の景観とは」と題して講演された。

◎山田義文専任講師は、日本建築士会連合会機関紙『建築士』2019年1月号に『潜在的なバリア』に気づく意義、同年2月号に「建築学科で学ぶことの意義」と題して寄稿した。

◎1月23日、平成30年度第35回福島県建築文化賞の表彰式が行われ、渡邊宏非常勤講師が設計された「二本松

城山市民プール」(二本松市)、高橋岳志・濱尾博文非常勤講師が設計した「郡山ヘアメイクカレッジ」(郡山市)が、いずれも優秀賞を受賞した。

◎2月25日に日経BP社より出版された、日本大学工学部・ロハス工学編集委員会編『ロハス工学』に、建築学科から出村克宣教授、浦部智義教授、森山修治教授、齋藤俊克准教授、山岸吉弘専任講師が執筆した。



トピックス①

【人事】2019年度の主任に師橋憲貴教授、専攻主任に北野幸樹教授が着任した。

◎湯浅昇教授が「表層コンクリートの品質に関する一連の研究 A SERIES OF STUDY ON SURFACE LAYER CONCRETE QUALITY」で2019年日本建築学会賞(論文)を受賞した。(P3参照)

◎北野幸樹教授の研究室所属の井山智裕君(4年生)と江田貴史君(4年生)による長野県における持続的まちづくり活動の調査の一部が、長野県の地域新聞(市民タイムス・2019年5月16日版)に掲載された。

◎5月13～18日、ミシシッピ州立大学から教員2名と学生21名が来日し、建築工学科と創生デザイン学科を訪れ、ものづくりワークショップを行うなど、学生・教員交流を行った。

◎「せんだいデザインリーグ2019卒業設計日本一決定戦」(3月2～3日)で、

篠崎研究室の長瀬紅梨さん、佐藤裕士郎君、岩田研究室の金沢萌さん、野中俊彦君、久保大樹君、大内研究室の鈴木輝君の作品が、出展総数333作品の中から100選に選ばれた。

◎「デザイン女子No.1決定戦2019 NAGOYA」(2月12～25日)で、長瀬紅梨さんの作品「箱入り娘の夜」が特別賞を受賞した。(P20参照)

◎「2018年度(第89回)日本建築学会関東支部研究発表会」(発表総数322)で、伊藤紘之君(建築デザインコース・永井研究室・4年生)の「石綿含有吹付けロックウールの粉塵抑制に関する研究粉塵飛散抑制剤の噴霧条件の違いによる影響」が優秀研究報告集に掲載された。

◎昨年9月4～6日にかけて、東北大学で行われた日本建築学会大会(東北)学術講演会において、古田莉香子さん(廣田研、D2)「インドネシア・スラバヤの

ルスン・ソンプにおける居室空間の間取りの構成に関する考察」、渡辺美沙子さん(渡辺研出身、2018年度修士卒)「戸建住宅における中間領域の分類に関する研究」が建築計画部門で、柴田知実君(藤本研、2018年度修士卒)「CFT柱の変形能力に関する基礎的研究 その2 限界部材角の定義による検討」が構造部門で若手優秀発表賞を受賞した。



ミシシッピ州立大学の学生と行ったものづくりワークショップ



トピックス

【人事】4月1日付で石鍋雄一郎准教授(理工学部建築学科より配置換え)と川嶋勝助教が着任した。

◎羽入敏樹教授は「建築空間における音場拡散の理論的枠組みと測定法に関する一連の研究」により、2019年日本建築学会賞(論文)を受賞した。(P5参照)

◎荻島紗希さん(現・理工学部建築学科3年)が「物語るインテリア」をテーマとした「インテリアプランニングコンペ2018」(主催/日本インテリアプランナー協会)の「特別審査員 河村容治賞」(応募総数237案、桜建会報114号既報)を受賞したことを事由に、平成30年度理工学部長賞を受賞した。



海洋建築工学科トピックス①

【人事】3月31日付で大塚文和教授・岡本強一教授が定年退職された。また、新規の専任教員として、星上幸良准教授が着任された。星上准教授の専門分野は、沿岸部での環境や防災に関わる海岸保全で、研究室名は「沿岸環境防災研究室」となった。

◎近藤典夫教授は「流体・構造連成問題への有限要素解析に関する一連の研究」により、2019年日本建築学会賞(論文)を受賞した。ここで示した計算手法・研究成果は建築構造分野をはじめとして、多くの工学分野で対象となる流体・構造連成問題に活用できるものであり、学術的・社会的貢献度および実用的価値は極めて高い。(P4参照)

◎畔柳昭雄特任教授は、平成31年度

科学技術分野の文部科学大臣表彰による「科学技術賞」(理解度増進)を受賞した。この受賞は、畔柳先生がこれまで行ってきた研究に基づくもので、香川大学の工学部副学部長の末永慶寛教授(海建OB)らと実施してきた「持続可能社会への地域の知恵に学ぶ水環境と減災の理解増進」に対する評価である。

◎新宮清志名誉教授は、ディレクトフォースの観光立国研究会のひとりとして、『日本再発見紀行(第2集)』(文芸社、2019年4月)を出版された。なお、担当したのは出身地である島根県で、「出雲大社など古代文物の集積地 簸川平野」と題している。



建築学科トピックス

【人事】3月31日付で、大川三雄特任教授、本杉省三特任教授、渡辺富雄特任教授、栗原のり子副手が退職された。今村雅樹教授が3月31日付で退職され、4月1日より特任教授に就任された。石鍋雄一郎助教が短期大学部建築・生活デザイン学科に異動、井本佐保里助教、小泉雅生客員教授が着任された。

◎今村雅樹特任教授が委員をつとめる建築トークイン上越実行委員会らが、「大学連携による教育プログラム『建築トークイン上越』の企画および実践」によって「2018年日本建築学会賞(教育業績)」(主催/日本建築学会)を受賞した。また、山梨知彦非常勤講師らが、「桐朋学園大学調布キャンパス1号館」によって「2019年日本建築学会賞(作品)」を受賞した。その他、近藤創順非常勤講師らが、「めぐみ会第一弘光こども園新園舎」で「2019年日本建築学会作品選奨」に選ばれた。(P2参照)

◎静岡県焼津市の「花沢地区ビクターセンター実施設計業務委託プロポーザル」で、横井創馬建築設計事務所+山中新太郎准教授が受託候補者に選定された。本プロポーザルは、伝統的建造物を保存活用し、ビクターセンターを

整備するためのものであり、5社の中から選定された。横井創馬さんは理工学部建築学科(佐藤光彦研)の出身。

◎「2019照明デザイン賞」(主催/照明学会)で、今村雅樹特任教授らの建築作品「熊本県医師会館」が「入賞」した。最優秀賞1点、優秀賞3点に次ぐ入賞3点に選ばれた。

◎建築雑誌増刊「作品選集2019」(日本建築学会)に、今村雅樹特任教授、今川憲英氏(TIS & Partners)の建築作品「熊本県医師会館」が掲載された。他にも、小泉雅生客員教授らの「港南区総合庁舎」、八木佐千子非常勤講師らの「鋸南町都市交流施設・道の駅 保田小学校」、近藤創順非常勤講師らの「めぐみ会第一弘光こども園新園舎」が掲載されている。

◎「日本建築家協会優秀建築選100作品」(主催/日本建築家協会)に、今

村雅樹特任教授、今川憲英氏(TIS & Partners)の建築作品「熊本県医師会館」が選出された。他にも、小泉雅生客員教授の「港南区総合庁舎」、八木佐千子非常勤講師らの「畑中特殊バルブ工業 第四工場」「鋸南町都市交流施設・道の駅 保田小学校」、山梨知彦非常勤講師らの「長崎県庁舎」が選出されている。

◎「九州建築選2018」(主催/日本建築学会九州支部)で、今村雅樹特任教授、今川憲英氏(TIS & Partners)の建築作品「熊本県医師会館」が「佳作作品」に選出された。

◎古澤大輔助教の共著書(監修も担当)『アーキテクトプラス “設計周辺” を巻き込む』(ユウブックス)が刊行された。本書は、企画やリサーチ、コンサルティングといった領域でも活躍する8組の建築家へのインタビュー集。

左/花沢地区ビクターセンターのパス。右/熊本県医師会館の電車通り側外観。有孔鉄板の表層と漏れる光で構成されるファサード。写真/平井広行



桜建会報 NO.115 2019-July
発行人 齋藤男
編集 校門建築会広報委員会
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
日本大学理工学部内

広報委員会
委員長 佐藤慎也(理工学部建築学科)
副委員長 塩川博義(生産工学部建築工学科)
矢代真己(短期大学部建築・生活デザイン学科)
委員 大川三雄(日本大学非常勤講師)
山本和清(理工学部海洋建築工学科)
亀井靖子(生産工学部建築工学科)
齋藤俊克(工学部建築学科)
北川健太(セカイ)
大西正紀(mosaki)
西山麻夕美(フリー編集者)

桜建会事務局
住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
理工学部駿河台校舎タワー・スコラ7階S708奥
TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216
E-mail kaiin@okenkai.jp
ホームページ http://www.okenkai.jp/
専任/星野麻衣子
非常勤/櫻井佐和、大木明子
業務時間/AM10:00~PM5:00(月~金)



海洋建築工学科トピックス②

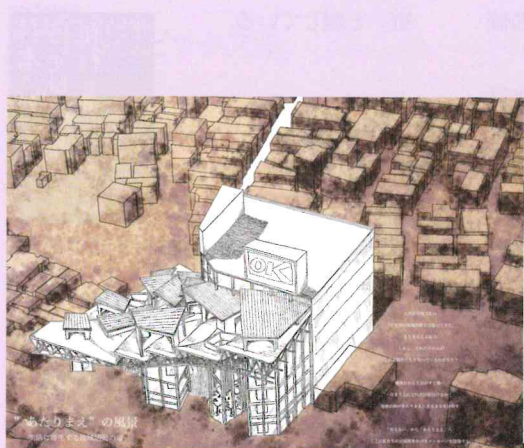
◎建築分野をはじめ、さまざまな分野でデザインを学ぶ大学生らが作品づくりを通じて、感性と創造力を競う「第50回毎日・DAS学生デザイン賞」大学生の部(主催/DAS:総合デザイナー協会・毎日新聞社、サントリーコミュニケーションズ協力)のグランプリ「金の卵賞」に、服部立さん(小林直明研究室)の「Singapore Aquitecture」が選ばれた。昨年の黄さん(佐藤信治研究室)に続く2年連続の卒業設計日本一の快挙である。



「Singapore Aquitecture」



建築設計トピックス②

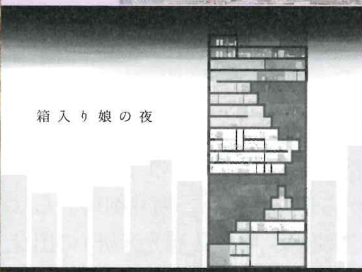


上左/「都山-地産地消型超高層集合住宅-」。上右/「天空の靈廟」。下左/「あたりまえの風景」。下右/「箱入り娘の夜」



Urban Mountain

~地産地消型超高層集合住宅~



箱入り娘の夜



トピックス②

◎12月13日、三協アルミ主催第4回学生建築デザインコンペ「未来のとびらコンテスト《大学生版》」で、野口樹君(浦部研・4年)の作品「Urban Mountain」が特別賞を受賞した。

◎東北6県+新潟の建築学生を対象としたデザインコンペ「TOHOKU+N YOUTH DESIGN AWARD 2018」で、藤野純也君(浦部研・M2)の作品「停留食堂-窯を介した交流の場-」、寺沢鳳成君(速水研・H30年度卒)の作品「組重-浴衣を羽織り、髪を結うように-」が佳作に入選した。

◎「第16回主張する「みせ」学生デザインコンペ」(主催/商業施設技術団体連合会)で、藤野純也君(浦部研・M2)の作品「壁面ミュージアム-地方都市の空白を彩る-」が奨励賞を受賞した。



Urban Mountain

停留食堂



上/「Urban Mountain」。中/「停留食堂-窯を介した交流の場-」。下/「壁面ミュージアム-地方都市の空白を彩る-」



トピックス②



◎「第19回卒業設計コンクール展」(4月13~16日・出品総数44)で、渡邊健太郎君(M1・岩田研)の「都山-地産地消型超高層集合住宅-」が準埼玉建築設計監理協会賞を、遠藤涼平君(現M1・岩田研)の「天空の靈廟」が特別審査員賞を受賞した。

◎「第31回千葉県建築学生賞千葉県建築卒業設計コンクール2019」(3月9~10日)で、小山佳織さん(居住空間デザインコース・岩田研出身)の「あたりまえの風景」が奨励賞と千葉県建築設計士が選ぶ作品賞を、長瀬紅梨さん(篠崎研出身)の「箱入り娘の夜」が奨励賞を受賞した。